

Richard H. Robinson :

The Buddhist Religion

—A Historical Introduction—

平野修

本書は次の五章から成っている。

第一章「今日の様相」

第二章「ゴータマ・ブッタの生涯と教え」

第三章「インド佛教の展開」

第四章「インド外での展開」

第五章「過去・現在・未来」

それに最後に各章の参考文献が載せてある。

著者は「A Historical Introduction」とサブタイトルを付しているように本書は歴史を辿りながら、そこに思想の形・流れを観察していくスタイルになっている。

佛教の歴史といっても、それは単独であるわけではないから、様々な自然・社会情況と触れあい、切れあって織りなすものであるから、十全な姿を再現することは夢であり、まして一書に総めることは不可能である。それで本書も概要となるのだが、重要な点が適切に述べられており、立派な佛教概要書となっている。

大河にも似た佛教の巨大な流れを歴史という河床を辿ることで跡づけようとする動きが近代非常に強くなった。これは極めて当然なことであって、人間が人間自身を問題にするとき、必然的にその背景として歴史の解明が鍵になる、という近代の大きな思潮によるのである。佛教といえどもその思潮の動きから例外ではなかった。そのために佛教は今までの様に佛教徒だけが学ぶという場から一挙に広い、新たな場へ出たのである。ここに大変困難な問題が当然生ずる。そのことはあとで少し触れることにして、ともかく、広い場に出たということは、佛教の歴史も伝統もない国々でも佛教の研究が可能となり、様々な角度から見られるようになったことを意味する。

今、このロビンソン博士の「The Buddhist Religion」もそのような背景から生みだされたものである。

そもそもこの書は「The Religious Life of man」というシリーズの中の一冊であり、ロビンソン博士が「佛教」篇を扱ったのである。

先ず著者は現代世界における佛教の模様を描く。価値の変化・多様化した現代に於て、佛教はいかなる在り方をしているのか、又、社会情勢がどのような形で反映しているのかをインド、セイロン、ヴェトナム、日本、アメリカ、イギリスの諸国に於て見ている。

特に現在なお戦争状態にあるヴェトナムを描いた箇所が印象的である。

著者は戦闘機、軍用のトラックの轟音、時折聞こえてくる弾

音の中にいたのである。ここでは当然、政治と佛教の関わりが大きな問題となっている。それについては、いろいろな思惑・議論があるにしても一九六三年、六月に焼身自殺した七十三才の老僧の悲しさが超えられるであろうか。

他の国々では近代化、伝統の形式化、見失われつつある思维方法等、佛教徒にとって非常に難解な問題が現実逼迫ってきている。そんな中で、インドに來ているラマ僧の謎めいた奇異な行動が妙に浮びあがって見える。

著者はこのような模様をそのまま描いて、それについて何の批判・主張をなさない。それは正しいことのように思える。現代の中にあつて現代の全体像を捉えることは誰にも出来ないことであるから。

第二章は佛陀の八相成道を中心に多くの文献を駆使して、佛陀とその周辺が述べられている。

ロビンソン博士が初転法輪で説かれたといわれている「中道に」について述べている所を少し紹介してみよう。

中道はギリシヤ・中国で言う中道・中庸とも似ているが、それら以上の意味を含んでいて、哲学的には縁起が中道を、実践的には八聖道がそれを意味する。

実践上の中道である八聖道は三学に要約できる。つまり、戒に正語・正業・正命、定には正精進・正念・正定が、慧には正見・正思惟が当たる。この三学によって解脱を得る意味が中道にあるのであつて、単に放恣や苦行を離れて健康な生活をする、といったことだけではない。だから中道の教説は万人にとって

意味ある親しみやすいものである、と著者は語っている。

この第二章は佛陀伝であるので、次の様な問題をはらんでいる。それは、佛陀の伝記と言つても經典を離れては考えられない、という性質上、史料の批判検討が大きな問題になる、ということである。今、博士は史料を神話・誇張と判断して取捨していく立場をとらず、そのまま取りあげて、理解を試みる立場にたつている。そこにはいろいろと問題はあつても、そのような著者の態度はかえつて読者を思索に誘う結果となるであろう。

第三章は前半で佛滅後の教団のたどつた経過、アシカカ王のこと、それと僧伽内での生活・規則について述べられてある。特に戒律について詳しく説明がなされている。

後半は大乗佛教の諸問題、つまり、菩薩・菩薩道・空觀・唯識思想、それに文珠・普賢・觀音の大菩薩や阿弥陀・毘盧沙那佛等の經典でよく知られている佛・菩薩が取りあつかわれている。

空觀のところ著者はこの教説の危険な面（悪取空）を述べると同時に、この教説によつて宗教生活が根本的に考え直されたと述べる。つまり、僧と在俗信者という差別や男・女・貧・富、の区別も本質的な意味をもち、仮りなものであるにすぎない、という広い大きな場が開かれたからである。この点に著者は大乘の意義を見ている。

また、著者は縁起に関して、これは本質的實在というより「記述的な法則」であると言っている。「記述的(descriptive)」

ということであれば、観察・科学に深く結びついてくる。だからこの点に空・縁起に関する誤解の芽があると著者は言う。

現代の科学が本性、属性の説明パターンを捨てて久しい。おかげで、我々は今日、形而上学に於ては立派な空論者であり、自己や神学に関してもそうなっている。だが、それは混乱であっても空の正しい理解ではない、と著者は言う。空、縁起が甚深微妙の法と呼ばれる所以であろうか。ここにわれわれの今後の課題があるように思える。

空のそのような危険性・難解性の故に、どうしても二諦説が関係してくることを著者は続けて語っている。つまり、「存在論的不二論」がこの世にもたらす混乱を二諦説という「認識論的二元論」が秩序を保つ役割を果していると見るのである。また著者はこの二諦説は般若経の根底的原理と言う。そう言えるかもしれないが、二諦説は別に般若経に固有なことではない。大乘佛教である限り当然出てくる問題であろう。

というのは大乘の目標が一切衆生の解脱にあるからである。だから法は説かれねばならない。しかし説けば相対化を免れ得ない。相対的真実であれば一切衆生は摂し得ない。このような理由もまた二諦説に考えられぬであろうか。

それはともかくとして更にロビンソン博士は大乘の重要な問題として菩薩のことに言及している。特に大菩薩に注意をはらっている。著者は文珠・観音・勢至・弥勒等の菩薩を「*celestial bodhisattva*」と呼んでいる。だが決して「架空上」のとは言っていない。それはこれらの菩薩が衆人の信仰の対象となり、

伝統をもっているからに違いない。それでそれらの菩薩について各々説明が付されてある。

それに続いて *celestial buddha* が語られる。先の *celestial bodhisattva* が佛陀の内景としてあらわれるのに対して、これは生身の佛陀に対して法身が考えられて出てくることからであろう。この佛陀観の確立が佛国土を開いてくる。そのことに著者は法華経を引用して触れている。

しかし博士がこの節で最も強く関心を示していることは阿弥陀佛とその佛による救済の問題である。

著者は大無量寿経の法蔵菩薩の物語を述べ、第十八・十九・二十願からその救済を考えている。著者はただ信仰するだけで救済されることに疑問を出す。つまり人間の努力の必要性を強調し、インドでの阿弥陀佛信仰は浄信の宗教よりはむしろ思惟（観佛）の宗教であったと言う。

当然、そのようなことも言われようが、ただ、この浄土教には長い歴史があり、実践があるから単に原典上からのみ推し計れない。それに、インド佛教を佛教の規範と考え、そこから佛教の歴史を考えると釈尊在世の佛教以外は発展形態であり、時には誤解と考えられる、という変なことになってしまふ。その場合、佛陀の教えは、人々の自覚をとうして伝わる、という事実が見過されているのではないであろうか。

ともあれ博士の出す問題について再考する必要がある。

更にこの章では唯識、金剛乘（タントラ）を解説し、インドでの佛教の滅亡を述べて章を閉じている。

第四章は佛教の伝わった中国、日本、南アジア、チベットでの佛教各宗の解説と佛教徒の業績を述べている。

第五章は佛教の過去・現在・未来について述べられたものである。

出口がないことへの不安と焦燥がただよい、矛盾や不合理なもの、の解消をめざした近代化・合理化が更に深い矛盾を生みだす混乱する現代の中で当然佛教もその在り方を問われる。

博士は言う。

過去に於て、佛教の変革はなされてきた。真にこの世の人々が願っていることを自らのうちに見出し出した人によって。

だからと言って博士は楽観しているわけではない。逆である。本書を読む人に絶えまぬ努力を要求しているのである。願いの実現のために博士がしていたように。

(Dickenson Publishing Company, Ltd Belmont, California,
1970, 136 pp.)